

## 第一問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

第一人称の死は、決して体験されたことのない、未知の何ものかである。論理的に知りえないものである。知りえないものに対して恐怖はどういう形を取るのか。もちろん、死への恐怖と呼ばれるものの中には、苦しみへの恐怖、痛みへの恐怖が含まれていることはたしかである。それは死への恐怖というよりは、死に臨んだある苦痛の状態としての生への恐怖である。

死に勝る苦しみ、という表現がある。では死は苦しみの極限としてあるのか。そうではあるまい。苦しむのは生である。苦しみは生きていることの一つの証である。生の状態である。死が生の終わりなら、死は苦しみの終わりでもある。しかし、繰り返すが、私という第一人称にとって、死は、完璧な未知である。本当に死は苦しみの終わりなのかどうか、それを言うことさえ不可能なものとして、死はある。

したがって、いわゆる死への恐怖は、苦しむ生への恐怖を含んでいるにせよ、それだけではあるまい。

生への盲目的な執着が、ヒトが生物であることの明証であるとすれば、死への恐怖はヒトが人間であることの明証であると言えぬだろうか。

これを消極的な面から考えてみよう。第三人称の死は、私にとって、消滅であり、消失であった。したがって、それは、本当の意味での「死」ではない。自分の前に立ちただかる未知の深淵としての死の何たるかを知ろうとする、空虚むなしい努力のための、何らの糧にもならない。自分の万年筆やハンカチや財布をいくら紛失したとしても、それで自分の死について何か感ずるところあったとは言えまい。

そして、第一人称の死、つねに未来形でしかありえないものが、現実化したとき、「私は、誰からも手助けを受けることなく、

完全な孤絶のなかで、それを体験することになる。第三人称の死が、「私」にとって消滅であるならば、第三者にとって「私」の死は同じように単なる消滅以外のものではありえないだろう。「私」にとって一度も体験したことのない「私の死」を、私は、自分以外の一切の他に對して架すべき何らの橋きょうほもないうまに、絶対の孤のうちに、引き受けなければならぬ。

このとき、それまで陳腐ちんぷだった第三人称の死の一つずつが、もしかして自分がこれから引き受けようとしている死の先達として、意味をもってくるように思われるかもしれないにせよ、もとよりそれは、クウソaな期待に過ぎない。

この「私」の死のもつ徹底的孤絶さのゆえに、人は、迎えるべき死への恐怖を増幅された形で感ずる。日常的世界のなかでは、つねに人間として、人どうしの間、関係性のなかで生きてきたわれわれは、たとえ絶海の孤島に独りあつてさえ自然のなかに友をつくり人間的生活の回復への微かな期待を決して捨てることのないわれわれは、死において、かかる一切の人間としての関係性を喪うしなつて、ただ一人で、死を引き受けなければならぬ。このことへの恐怖こそ、逆説的に、人が人間として生きてきたことへの明証となるだろう。あえて、「消極的」と呼んだのは、この逆説性のゆえである。

他方、このような死への恐怖は、積極的な意味でも、人の人間たることの明証の一つたりうると言えよう。それには、第二人称が介在することになる。

一般に、人が自らの究極的孤絶性を肌膚に烙印のごとく自覚するのは、死を迎えることにおいて最も著しいが、しかしその孤絶性を知性によって理解することは、むしろたやすい。とりわけデカルト以来の西欧近代思想の洗礼を受けたものにとつてはそうである。そして現実の世界における「人間」性、つまり人が人と人との間の関係性のなかで生きていることと、表層的に理解された人の孤絶性との矛盾を乗り越えるために、われわれはさまざまな方法を案出して、孤絶した人と人との間に、何らかの架橋を施さんとするのである。

しかし、知性において理解された表層的な人間の孤絶性は、むしろある立場からすれば誤つていえるとも言えるのかもしれない。

例えば、私は「私」として、外界から隔絶されているかのように思われるが、私の身体さえ、楽器や楽弓のように、あたかも拡大されたかのように感じられることさえある。車を運転する熟達したドライヴァーは、車の外壁をあたかも自らの身体と同じように感

じる。他方、人間は自己によつて自らの身体を支配・制御しているかのよう<sup>b</sup>にサツカクしているが、実は、自らの身体的支配はつねに他者のモホウによつて獲得される、という事実を忘れることはできない。高校生のとき私は鉄棒の蹴上りがどうしてもできなかった。ところがあるとき私の前に何人かの人びとが、次々に蹴上りを演じてみせた。何の気なく次に鉄棒に下つた私は、それまでに演じた人びとと全く同じことをして、何ということもなく、何らの自覚もなしで、鉄棒の上によつてしまった。このとき、<sup>工</sup>「われわれ」が「私」を造りあげていた、という言い方が許されるだろう。

このような状況は、幼児においてもつとはつきりしている。幼児にとつて、母親と自分との区別ははつきりしていない。ある程度の年齢に達すると母親は子供に自分を「僕」と呼ばせるようになる。年齢が早過ぎると「僕」という呼称は「僕」を指さしないで終わってしまう。母親がそう呼ぶから僕は「僕」であるに過ぎない。母親さえ、ときに「僕、そんなことしちゃだめじゃない」などと言う。このとき母親と「僕」とは、まだ分離しない「われわれ」意識で連なっている。幼児は、次第にそうした言わば前個我的な状況から、母親からの反射の光によつて、「僕」を僕として捉えるようになり、それと反射的に母親を第二人称的他者として捉えるようになる。前個我的「われわれ」状況は、第一人称と第二人称の他者どうしに分極化すると言つてよからう。つまり、主体の集合体としての「われわれ」は、前個我的「われわれ」状況のある変<sup>ワァーシヨ</sup>型として考えるべきではないか。

愛し合う二人の没我的<sup>d</sup>ホウヨウは、かつての自らを育てた前個我的「われわれ」状況のある形での回復を指向する、一瞬の回復ではないか。

この観点から見るとき、個我的孤絶性は、少なくとも生にある限り、むしろ、抽象的構成に近いものと言うべきである。<sup>オ</sup>それゆえにこそ、第一人称が迎えんとする死こそ、人間にとつて極限の孤絶性、仮借なき絶望の孤在を照射する唯一つのものなのかもしれない。



## 第二 問

次の文章は、千人の後をもつ大王が、一人の後(菩薩女御)に愛情を傾け、その後が懐妊したという話に続く場面である。これを読んで、後の設問に答えよ。

九百九十九人の后たち、第一より第七に当たる宮に集まり、いかげんとぞ歎なげき合はせられける。ただこの王子の果報のほどを知らんとて、ある相人さうじんを召して、この王子のことを問はれけり。「菩薩女御の孕はらみたまへるは、王子か姫宮か。また果報アのほどを相し申せ。不審におぼゆる」とありければ、相人、文書を開き申しけるは、「孕みたまへる御子は王子にておはしますが、御命は八千五百歳なり。国土安穩にして、この時、万民みな自在けざいの王者にあるべし」とぞ占ひ申しける。后たち相人に仰せられけるは、「この王子の御事をば、大王の御前にて我らが言ふままに相し申せ。禄ぞくは望みにしたがふべし。この王子は、生じたまひては七箇日といはば、九足八面の鬼となりて、身より火を出いだし、都をはじめとして、一天をみな焼失すべし。この鬼は三色にして、身長は六十丈に倍すべし。大王食はれたまふべし」。また言はく、「鬼波国きばこくより九十九億の鬼王来りて、大風起こし、大水出だして、一天をばみな海と成すべしと申せ」とて、おのおの分々にしたがひて、禄を相人に賜ふ。あるいは金五百両、あるいは千両なり。しかのみならず、綾錦あやじきの類は莫大なり。相人は喜びて、「承りぬ」とて答へ申しける。后たちは、「あなかしこ、あなかしこ」とぞ口秘くひしめしたまひける。相人、「いかでか違へたてまつるべき」と申し立つ。

中一日ありて、后たち、大王の御前に参りて、申し合はせられけるは、「后の御懐妊のこと、王子とも姫宮ともいぶかし。早く承らん。相人を召して聞こしめすべし。余りにおぼゆるものかな。時にしかるべしとおぼしめして、件くだんの相人を召す。后たち、仰せられける菩薩女御の御産のことを、何の子ぞと申せと言ひながら、約束を違へんずらんと、おのおの心内はひとへに鬼のごとし。相人は雑書(注2)を開きて目録を見たてまつるに、王子の御果報めでたきこと申すに及ばず、この後の御年齢はいかばかりと申す

に、三百六十歳とおぼえたり。やがて相人は目録にまかせて見れば、涙もさらに留まらず。これほどめでたくおはします君を、あらぬ様に申さんことの心憂きよとは思へども、前の約束のごとく占ひ申しけり。大王はこのことを聞こしめし、「親となり、子となること、たまたまもありがたし。」<sup>(注3)</sup>この世一つならぬこと。今日までに子といふ者いまだ見ず。いかなる鬼とも生まれ来らば来れ。親と子と知られ、一日も見て後にもかかぬならんことは苦しからじ」とて、御用もなかりけり。

『神道集』

〔注〕 (1) この王子——これから生まれてくる子のこと。

(2) 雑書——運勢・吉凶などを記した書。

(3) この世一つならぬこと——この世だけではない、深い因縁があることなのだ。

## 設問

(一) 傍線部ア・イを現代語訳せよ。

(二) 傍線部ウ「相人を召して聞こしめすべし」について、何を「聞こしめす」というのか、内容がわかるように現代語訳せよ。

(三) 傍線部エ・オを現代語訳せよ。

第三 問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。ただし、設問の都合で送り仮名を省いたところがある。

応<sup>おう</sup> 郴<sup>ちん</sup> 為<sup>り</sup> 汲<sup>きふ</sup> 令<sup>ノ</sup>。以<sup>テ</sup> 夏<sup>ニ</sup> 至<sup>ル</sup> 日<sup>ヲ</sup> 見<sup>ミ</sup> 主<sup>ニ</sup> 簿<sup>ヲ</sup> 杜<sup>と</sup> 宣<sup>せん</sup> 賜<sup>フ</sup> 酒<sup>ヲ</sup>。時<sup>ニ</sup> 北<sup>ノ</sup> 壁<sup>ノ</sup> 上<sup>ニ</sup> 有<sup>リ</sup> 懸<sup>カル</sup> 赤<sup>ニ</sup> 弩<sup>ト</sup> 照<sup>ウ</sup> 二

於<sup>ニ</sup> 盃<sup>ノ</sup> 中<sup>ニ</sup> 其<sup>ノ</sup> 形<sup>ノ</sup> 如<sup>シ</sup> 蛇<sup>ノ</sup>。宣<sup>おそ</sup> 畏<sup>レ</sup> 惡<sup>レ</sup> 之<sup>ヲ</sup>。然<sup>ニ</sup> 不<sup>レ</sup> 敢<sup>テ</sup> 不<sup>レ</sup> 飲<sup>ム</sup>。其<sup>ノ</sup> 日<sup>ニ</sup> 便<sup>す</sup> 得<sup>テ</sup> 二 胸<sup>ノ</sup> 腹<sup>ノ</sup> 痛<sup>ク</sup> 切<sup>ナル</sup>、

妨<sup>シ</sup> 損<sup>シ</sup> 飲<sup>フ</sup> 食<sup>ヲ</sup> 大<sup>イ</sup> 以<sup>テ</sup> 羸<sup>る</sup> 露<sup>ス</sup>。攻<sup>スル</sup> 治<sup>コト</sup> 万<sup>ナル</sup> 端<sup>モ</sup> 不<sup>レ</sup> 為<sup>レ</sup> 瘡<sup>ヲ</sup>。後<sup>ニ</sup> 郴<sup>ヲ</sup> 因<sup>リ</sup> 事<sup>ニ</sup> 過<sup>リ</sup> 至<sup>ル</sup> 二 宣<sup>ノ</sup> 家<sup>ニ</sup>、

窺<sup>う</sup> 視<sup>カ</sup> 問<sup>フ</sup> 二 其<sup>ノ</sup> 变<sup>ハ</sup> 故<sup>ヲ</sup> 云<sup>フ</sup>、「畏<sup>ル</sup> 二 此<sup>ノ</sup> 蛇<sup>ヲ</sup>。蛇<sup>ヲ</sup> 入<sup>レ</sup> 二 腹<sup>ノ</sup> 中<sup>ニ</sup>。」郴<sup>ヲ</sup> 還<sup>リ</sup> 二 聽<sup>ク</sup> 事<sup>ヲ</sup> 思<sup>フ</sup> 惟<sup>スル</sup> 良<sup>ク</sup> 久<sup>シ</sup>、顧<sup>ミ</sup>

見<sup>ル</sup> 懸<sup>カル</sup> 弩<sup>ヲ</sup>、「必<sup>ズ</sup> 是<sup>レ</sup> 也<sup>ト</sup>。」則<sup>チ</sup> 使<sup>メ</sup> 二 鈴<sup>ヲ</sup> 下<sup>シ</sup> 徐<sup>おも</sup> 扶<sup>カ</sup> 輦<sup>ヲ</sup> 載<sup>セ</sup> 宣<sup>ヲ</sup> 於<sup>テ</sup> 二 故<sup>ノ</sup> 処<sup>ニ</sup> 設<sup>ク</sup> 酒<sup>ヲ</sup> 盃<sup>ノ</sup> 中<sup>ニ</sup> 故<sup>ニ</sup>

復<sup>ま</sup> 有<sup>リ</sup> 蛇<sup>ヲ</sup>。因<sup>リ</sup> 謂<sup>フ</sup> 宣<sup>ニ</sup>、「此<sup>レ</sup> 壁<sup>ノ</sup> 上<sup>ノ</sup> 弩<sup>ノ</sup> 影<sup>ナル</sup> 耳<sup>ノ</sup>、非<sup>ズ</sup> 有<sup>ル</sup> 二 他<sup>ノ</sup> 怪<sup>ヲ</sup>。」宣<sup>ノ</sup> 意<sup>ニ</sup> 遂<sup>ニ</sup> 解<sup>ケ</sup> 甚<sup>ダ</sup> 夷<sup>イ</sup> 憚<sup>エ</sup>、由<sup>リ</sup>

是<sup>レ</sup> 瘳<sup>イ</sup> 平<sup>ラ</sup>。

(応劭『風俗通義』による)

〔注〕 ○応楸——後漢の人。 ○汲令——汲県(河南省)の長官。 ○主簿杜宣——主簿は県の長官の部下。杜宣は人名。

○弩——おおゆみ。 ○羸露——衰弱。 ○聴事——役所。 ○鈴下——県の長官の護衛兵。 ○夷憚——よろこぶ。

## 設問

(一) 「宣畏惡之。然不敢不飲」とあるが、

(ア) これを平易な現代語に訳せ。

(イ) 杜宣はなぜ「然不敢不飲」だったのか。簡潔に説明せよ。

(二) 「得胸腹痛切、妨損飲食、大以羸露」とあるが、そうなったのはなぜか。簡潔に説明せよ。

(三) 「必是也」とはどういうことか。具体的に説明せよ。

(四) 「由是瘳平」とあるが、それはなぜか。わかりやすく説明せよ。